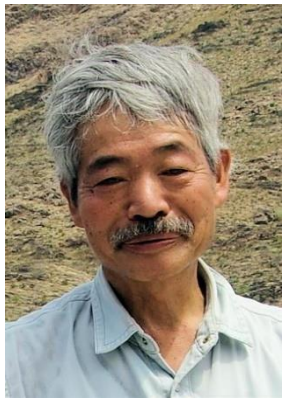
延岡市立岡富中学校
じんけん通信
第１１号
（通算１９号）
2019 年
12 月 24 日
【文責】
人権・同和教育
担当：長友伸二

Human-Rights Communication

中村哲医師とハンセン病

今月4日(水)、アフガニスタンで福岡市のNGO「ペシャワール会」の現地代表・中村哲さん(73)が銃撃され、帰らぬ人となりました。これは世界的にも大きなニュースになりました。医療だけでなく、かんがい事業にも従事してきた中村さん。今回は、中村さんの功績から学びたいと思います。



NGO「ペシャワール会」現地代表・中村哲さん
（sankei.com より）

中村さんは1984年、パキスタン・ペシャワールの病院に派遣されました。それは、当時、現地に蔓延していたハンセン病の治療に当たるためでした。

ハンセン病は、1873年にノルウェーの医師ハンセンが発見した「らい菌」によって、主に皮膚や抹消神経が侵される感染症の一つです。この菌の毒はごく弱く、感染しても発病することはきわめて稀です。現在では、化学療法や多剤併用療法が広く行われ、確実に治癒できるようになっています。

化学療法がなかったころは、この病気は「らい」あるいは「らい病」と呼ばれ、不治の病と考えられる一方、顔面や手足などに出る後遺症がときに目立つことから、恐ろしい伝染病のように受け止められてきました。

当時、パキスタン全土で患者2万人に対し、専門医はたった3人。知識不足のため、医師たちはハンセン病とその患者たちを敬遠していたのです。

現状を知り、中村さんは自ら、ハンセン病棟担当を申し出ました。「誰も行きたがらない所へいけ。誰もやりたがらぬことを為せ」――のちに「ペシャワール会」基本方針となる言葉通りの行動でした。

◆

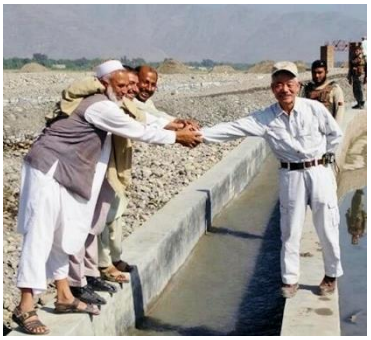
ここに、一つのエピソードがあります。ハンセン病は手足の感覚に麻痺を起こすため痛みを感じません。特に足の裏は傷つきやすく、放置すると皮膚ガンや骨髄炎を起こし、切断手術に至ることがありました。足を守るための履物はというと、ボロボロで、足の裏に傷ができない方が不思議でした。

中村さんは町の靴屋に通いつめ、サンダルを購入しては分解、理想的なサンダル作りに没頭しました。快適さ、素材、コストなどを考え、靴の工房を開きました。医師が、です。これが大当たりで、そのサンダルが出回り始めてから、患者の足の切断が激減したそうです。

中村さんの行動は「根源にさかのぼって考える」そのものでした。感染症対策としての清潔な水の確保もその一つだったのです。「なぜ医療チームが井戸と用水路を作るのか」という質問に「飢えと渇きは薬では治せないから」と答えた中村さん。その志を、次に伝えていきたいものです。（HP「ペシャワール会」、新聞各紙を参考に構成）

◆

今年もあとわずかとなりました。どちらさまも良いお年をお迎えください。



アフガニスタンで、用水路開通に喜ぶ現地の職員と中村哲さん（ForbesJAPAN より）

岡富中ホームページでバックナンバーを公開中！

２０１９年度第１１号

【ご家庭から】ご感想をお待ちしております。学級担任にお渡しください。

年　　組／お名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（ペンネームでも O.K. ですよ！）

◆書いていただいた内容をこの通信で紹介してもよろしいですか？（　○　・　×　）